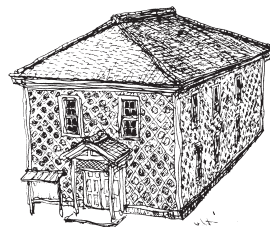


演説館



福澤先生とその門下生たちは、西洋のスピーチ・デイベートを研究し、わが国の「演説」を創始しました。三田演説館は、1875（明治8）年に開館した日本最初の演説会堂です。

●看護医療学部長

野末聖香のずえきよか

科学の知と臨床の知を統合的に学ぶ

看護医療学部は2001年に開設され、早いもので四半世紀近くが経ちました。卒業生は看護師・保健師・助産師等の看護職、養護教諭、大学教員、健康福祉関連の経営者、国際医療機関やNGOの職員などとして国内外で幅広く活躍しています。

本学部の教育の柱である看護学は、人々の命と健康を守り、その人らしく生きることができるよう、セルフケアの力を高め、クオリティ・オブ・ライフを支援する実践の科学です。そのため看護の専門性のみならず、多様な価値観を尊重する心、共感性、成熟した対人関係力を育みたいと考えています。看護の対象は、“人”という開かれた存在であり、常に環境の影響を受け変化しています。人を理解しケアするためには、体系的知識や客観的データに基づきつつ、一方で自身の感性やこれまでの経験を活かしながら、“目の前にいるこの人”と関わる必要があります。哲学者中村雄二郎氏は、個々の場所や時間の中で、対象の多義性を十分考慮に入れながら、それとの交流の中で事象を捉える方法——「臨床の知」の重要性を説いています*。学

生には、対象を客観的に理解するだけでなく、関わり合いの中で体験するさまざまな感情や葛藤に向き合い、それをケアに活かせるよう、科学の知と臨床の知を統合的に学んでほしいと思います。こうした学びが、多様性を重視した個別的で創造的な看護の知を生み出すことにつながると 생각합니다。

近年、健康課題はますます複雑化しており、グローバルな課題解決が求められています。AIやIoTは保健医療福祉サービスを大きく変えていくでしょう。激動する現代においては、科学の知と臨床の知を兼ね備え、事象の多様性に対応できる人材を育成することが必要です。本学部はこれからも、豊かな知識と技術を備えた看護実践家を、国際的視野と変革力で保健医療福祉の未来を切り拓く先導者を、そして自然科学的手法や人間科学的手法を駆使して看護の知を解き明かす研究者を輩出すべく、他学部・研究科との連携を強め、教育・研究に取り組んでまいりたいと思います。

※中村雄二郎「臨床の知とは何か」岩波新書（1992年）